

みなと 物語



東洋一の「釣魚台」 のおはなし

明治36年(1903年)に完成した築港大棧橋(現在の中央突堤)は、全長455メートル・幅員27メートルの巨大な鉄棧橋でした。明治37年(1904年)に始まった日露戦争によって、大棧橋には多くの軍用船が着岸しました。戦争が終わり再び一般開放されましたが、残念ながら大棧橋を利用する船はほとんどありませんでした。



大阪築港の絵葉書(なにわの海の時空館提供)

そこへ姿をみせはじめたのが魚釣り客です。天保山付近はもともと魚の宝庫で、大棧橋から外に向かって竿釣りをするばかりでなく、板張りをした橋面のすきまから糸をたらすだけで釣りが楽しめたそうです。



築港大棧橋と市電(大阪城天守閣蔵)

とてもよく釣れたらしく、橋の下には小船が待機し、橋面のすきまを通らない魚はたもてすくい、針をはずして駄賃を稼ぐという珍商売まで登場しました。大棧橋には納涼客もたくさん訪れました。夏になると6~7軒の料理屋やビアホールがオープンし、身近な遊び場として連日大賑わいになりました。当時市

電の名物であった二階付電車が「魚釣り電車」「納涼電車」と呼ばれたり新聞に「東洋一の釣魚台」「2,000万円の釣魚台」などと報じられたこともあったそうです。

しかし、大正初期の空前の景気の波にのって築港の利用が増大したことや、周辺に工場や倉庫が次々とできたことから、手軽な釣り場としての価値は徐々に失われていきました。



築港大棧橋のジオラマ(なにわの海の時空館提供)